

β本町橋

東横堀川とまちのつながりを探求する水辺の実験基地

BETA HOMMACHIBASHI

A waterside experimental base to explore the connection between the Higashiyokobori River and the town

岩瀬巧*¹, 松原茂樹*², 山田あすか*³
IWASE Takumi, MATSUBARA Shigeki and YAMADA Asuka

A waterside experimental base to explore the connection between the Higashiyokobori River and the city. The building has a stacked structure, with the 1st floor where everyone can relax and find information about the town, and the 2nd floor with offices and labs where people can think freely and realize what they want to do. Through 20 years of operation under private-public initiative, we aim to revitalize the town's economy while expanding the possibilities of the town, waterfront, and people.

Keywords : Waterside, Regional revitalization, Private-public initiative
水辺, 地域活性化, 官民連携

1. 本稿の概要

本稿では、大阪府大阪市本町橋にて、水都大阪構想のもとで官民連携による「20年」と区切られた事業期間を通し、まちを活性化しつつ、まち・水辺・ひとの可能性を広げることを目指している「β本町橋」の取り組みを報告する。本事例は、市民レベルの活動が行政を動かし、建築が不可能であった敷地にコミュニティ醸成と水辺活用促進活動の拠点が設立されたのが特徴的であり、これからのコミュニティ施設の計画に知見を与えられたい。

本事例は、大阪市の中心部を流れる東横堀川に架かる大正2年に完成した本町橋のたもとの河川敷地内に位置する。運営者らは、かつては淀川水系の豊かな水を活かし水路を巡らせて発展してきた大阪のまちにとって必要不可欠であった「水辺」の空間を活用する方法を探求し、その可能性の拡大を目的にしている。多様な

使われ方を呼び込み地域の人々の生活にこの水辺空間を結びつけていくため、「遊ぶ」「学ぶ」「働く」「暮らす」といった要素に注目し、その結節の拠点となるβ本町橋の誕生をきっかけに、動力船・人力船・マリナー・キオスク・キッチン・屋台・レンタルスペースなどの多彩なツールを備えている。

運営主体である一般社団法人水辺ラボは2006年に結成されたe-よこ会（東横堀川水辺再生）を母体に

表1 施設情報

施設情報	
所在地	大阪府大阪市中央区本町橋4-8
施設種別	レンタルスペース、カフェ、物販
運営主体	一般社団法人水辺ラボ
設計監理	MIST 井上真彦 高橋勝建築設計事務所 高橋勝
施工	嵩倉建設 林雅浩、木村晃子、渡辺翔太
面積	敷地面積：約1,333㎡ 建築面積：145.42㎡
構造・階数	木造2階建
従業員数	2名
訪問日	2023年6月22日
お話を伺った方	杉本容子氏（一般社団法人水辺ラボ 代表理事、株式会社ワイキューブ・ラボ 代表取締役）

*1 東京電機大学大学院未来科学研究科建築学専攻 修士課程

*2 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 准教授・博士（工学）

*3 東京電機大学未来科学部建築学科 教授・博士（工学）

*1 Master Stud., Architecture and Building Engineering, Graduate School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki Univ.

*2 Assoc. Prof., Division of Global Architecture, Graduate School of Eng. Osaka Univ. Dr. Eng.

*3 Professor, Dept. of Architecture, School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki Univ., Dr. Eng.

2019年に設立された組織であり、川や水辺空間での社会実験を通して市民レベルから水辺活用を呼びかけている。

本稿は2023年6月22日取材時の情報を中心に執筆されており、2024年6月現在の活動・運営内容と異なる可能性があることをあらかじめご了承ください。

2. 建築概要

本事例が面する東横堀川は上部を高速道路に覆われ



図1 敷地周辺
出典：国土地理院，地理院地図，（参照日 2024. 2. 29）



写真1 東横堀川とβ本町橋

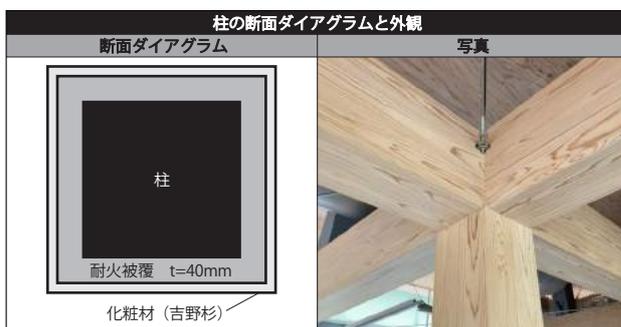


図2 柱断面ダイアグラムと外観写真

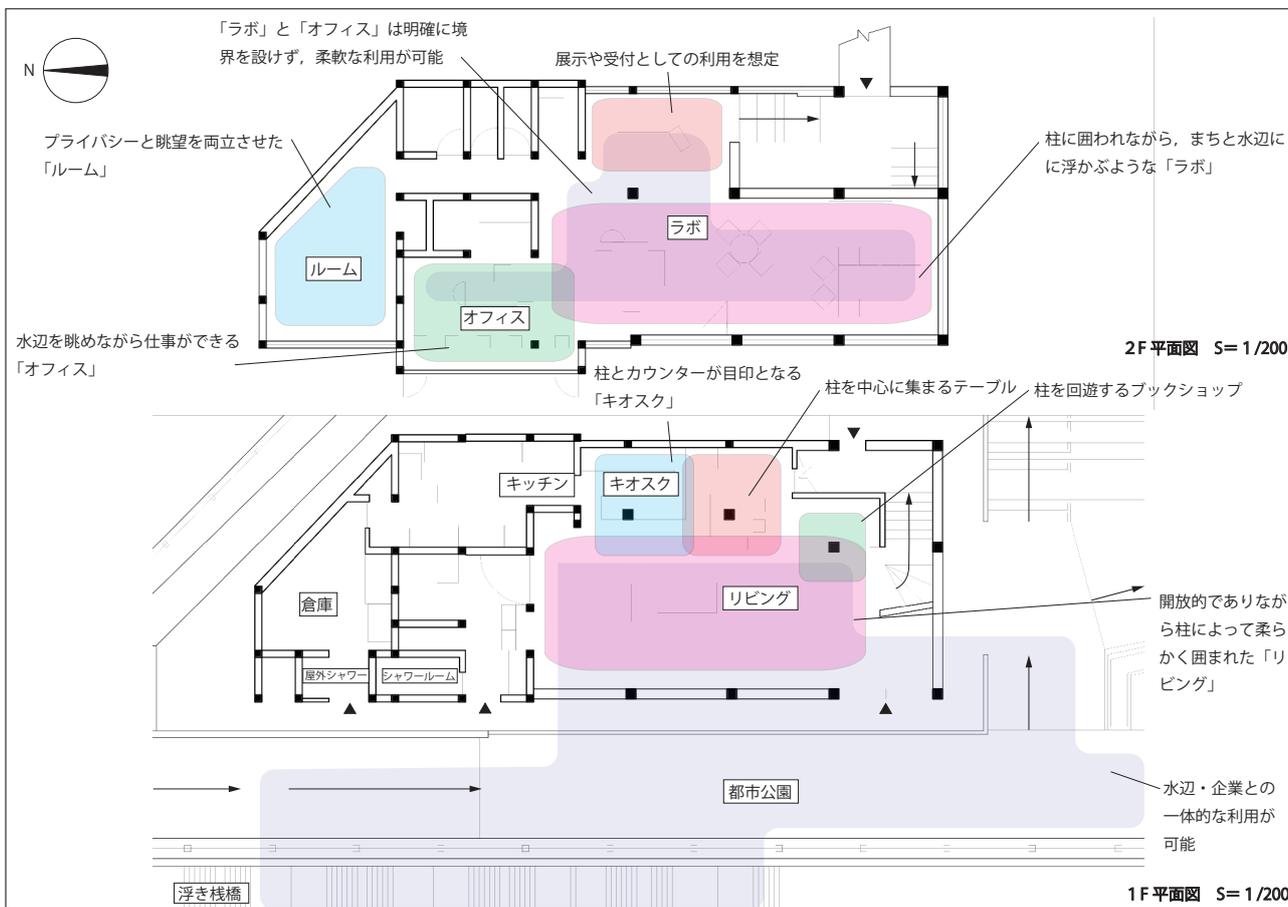


図3 平面図
出典：商店建築社，「商店建築 Jan. 2023」，p90-91 よりトレース



写真2 道路と建物に囲まれた東横堀川

出典：大阪市、「東横堀川等水辺の魅力空間づくり基本方針」, p18

表2 東横堀川での水場推進活動の経緯

年表	
西暦	出来事
2000年代 初頭	東横堀川は3K(怖い, 汚い, 暗い)の要素が揃うような状況
2001年	内閣府が第3次都市再生プロジェクトを採択
2002年	大阪府・大阪市・経済界が水の都大阪再生構想
2005年	船上ワーキングを行い, 大阪商工会議所, 水辺のランドスケープ研究会とともに, 「川が見えない」, 「まちが見えない」という意識を共有
2006年	商工会議所・周辺の会社・商店・住民を中心に「e-よこ会」が発足
2008年	現在まで続いている「e-よこ道通」を初めて開催 「係留チャレンジ」
2009年	「川舞台チャレンジ」
2019年	大阪府が公募型プロポーザルを実施
2020年	β本町橋が公募型プロポーザルにて採択される
2021年	β本町橋がオープン



写真3 係留チャレンジ

出典：一般社団法人水辺ラボ, 「東横堀川水辺ビジョン」, p2



写真4 川舞台チャレンジ

出典：一般社団法人水辺ラボ, 「東横堀川水辺ビジョン」, p2

ている川である(図1)(写真1)。木造二階建てで、2階部分は沿道と接続し、沿道から河川敷地に向かっていく坂から連続した1階が河川側に開けたメインフロアである。1階は「シタ」と名付けられ、誰でもくつろげる「リビング」、アクティビティ・プログラムの案内窓口である「キオスク」がある。2階は「ウエ」と名付けられ、空き時間には子供たちが遊ぶこともできる「ラボ」や「ルーム」などのレンタルスペース、β本町橋を活動拠点とする人々が使う共同オープンオフィスで構成されている(図3)。

設計者である高橋勝氏による設計趣旨には、「都市の中心部に木の架構で場所を造る」とあり、プロジェクトの特性上期限付きの建築であることや都市木造の可能性を追求する観点などから、耐火構造とした上で木造が採用されている。具体的には、柱の周りに約4cmの厚さの耐火被覆を施し、その上から吉野杉の化粧材で仕上げている(図2)。地元の職人たちと協力しながら進められることを企図し、構法には在来木造構法を採用した。架構は4.35m及び3m×3mを基本とする均一な格子を採用し、長く汎用的に使える空間の形成をねらっている。また、住宅と同じ流通サイズの木材を採用していることは、流通や加工、施工におけるメリットとなっている。

4. 活動経緯 (表2)

β本町橋が設立されるに至った発端として、市民活動の存在がある。2000年代初頭、東横堀川は3K(怖い, 汚い, 暗い)の要素が揃うような状況であり、都市を流れる河川でありながら有効利用されていなかった(写真2)。

そのような状況の中、内閣府は2001年に第3次都市再生プロジェクトを採択した。これに合わせて大阪府も2002年から2003年にかけて水の都大阪再生に向けて動き出した。明治の頃には「水の都」と呼ばれたが、昭和の時代にコンクリート護岸による治水が進み、水辺空間は人の生活の場とは離れていき、水質の汚染も進んだ。21世紀に入って、水路ネットワークや水面、そして水辺空間のポテンシャルを活かしてまちににぎわいをもたらす場として活用していく「水の都大阪再生構想」の元で、水辺のシンボル空間や船着場の整備、水辺空間の滞在空間としての利用促進、護岸や橋梁などのライトアップなど、さまざまなプロジェクトが進められてきた。市民たちはこの構想の立ち上げ期～初期から、ゲ

リラ的に市民活動を行い始めた。

2005年には船上ワーキングを行い、大阪商工会議所、水辺のランドスケープ研究会とともに、「川が見えない」、「まちが見えない」という意識を共有した。

2006年には商工会議所・周辺の会社・商店・住民を中心に「e-よこ会」が発足し、東横堀川の可能性を探るための活動がより拡大した。活動の方向性は、「予算ゼロでも、できることから行う」で、3K（怖い、汚い、暗い）の改善を目指した。具体的には、川掃除、橋の清掃、グリーンポットの設置などの活動を行っていた。

2008年秋には、現在まで続いている「e-よこ逍遥」を初めて開催した。「e-よこ逍遥」とは、東横堀川周辺の魅力を発信するイベントであり、1か月にわたって様々な催し物が行われた。具体的には、まちあるき、コンサート、ツアー、講演会を実施した。

また、e-よこ会は2009年にかけていくつかの社会実験を行った。

1つ目は、「係留チャレンジ」である（写真3）。前述したように大阪府は2001年より水の都大阪再生を政策として推進してきた。しかし、治水の安全対策上、船舶の係留を排除してきた状況があったため、都心部の舟

運活性化の妨げになっていた。そこで、e-よこ会は、3週間限定という条件のもとで仮棧橋で船を係留し、「船のパーキング化」に着手した。

2つ目は「川舞台チャレンジ」である（写真4）。水辺では以前よりベンチが何台か設置されていた。しかし、座っても壁が視界に入り景色がまったく見えないという状況であった。そのような状況の中、e-よこ会は6畳ほどのウッドデッキを設置した。それにより、デッキ上から川を眺められるだけでなく、川舞台としての活用が可能で、実際にヨガや能、ピクニックなどが行われた。そのほかにも、絵ハガキ展や音楽会を開催した。このように、e-よこ会は社会実験を通して川と人々の距離感を近づけるとともに、「川辺を使うのは良いこと」という意識を共有するきっかけづくりを行っていた。2011年には、「水都大阪水と光のまちづくり構想」が策定され、活動がより進展した。（図4）

5. β本町橋の設立と運営

前述の活動を積み重ねて2019年には、「本町橋BASE」にぎわい創造拠点創出・管理運営事業が始まった（図6）。大阪市の「本町橋BASE」にぎわい創造拠



図4 水都大阪のコンセプトプログラム

出典：水都大阪コンソーシアム、「水都大阪水と光のまちづくり構想概要版」, p1

点創出・管理運営事業者の募集は公募型のプロポーザルで実施され、要項によると、事業には以下3つの提案が求められた。

- (1) 日常的な水辺のにぎわい創出
- (2) 水辺のにぎわいと連携した舟運の活性化
- (3) 地域に根ざした拠点

これに対しβ本町橋は、水上アクティビティを楽しむことができ、多様な主体がレンタルスペースを活用することによって水辺に賑わいをもたらす原動力となる提案

をした。また、これまでの川・橋清掃、地域の魅力を発信する「e-よこ逍遥」などの活動の継続に活用できる拠点とし、地域に根ざした拠点となる提案をした。その結果、事業提案は採択された。

図5にβ本町橋と敷地周辺を示す。β本町橋や周辺の陸上部は都市公園区域であり、拠点の建築や敷地の占用には公園管理者である大阪市の許可が必要であった。これまでに行ってきた数々の活動も認められ、市の許可があり、施設の設置が可能となった。

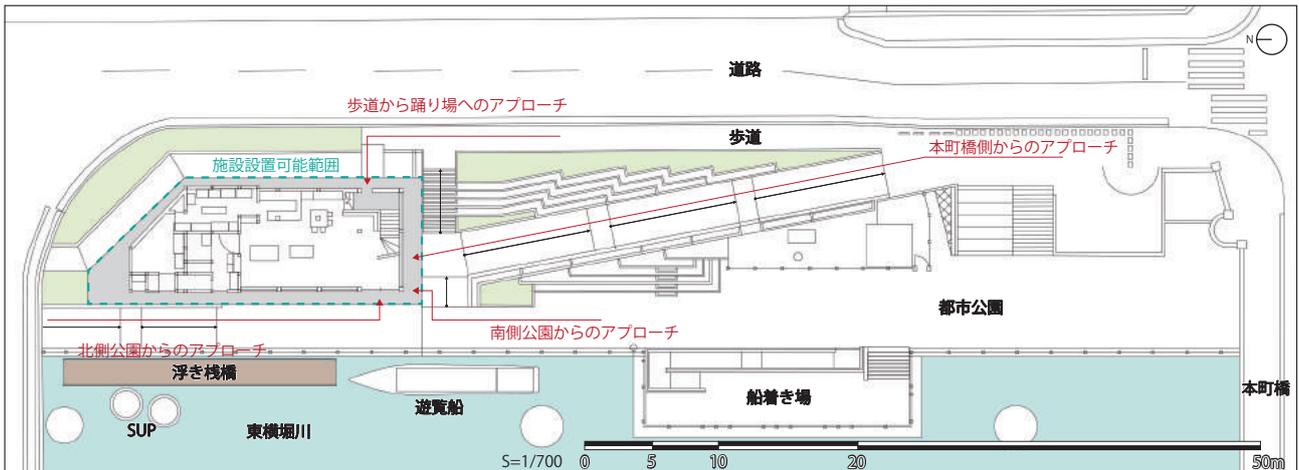


図5 β本町橋と敷地周辺

出典：MIST, 「β本町橋」よりトレース

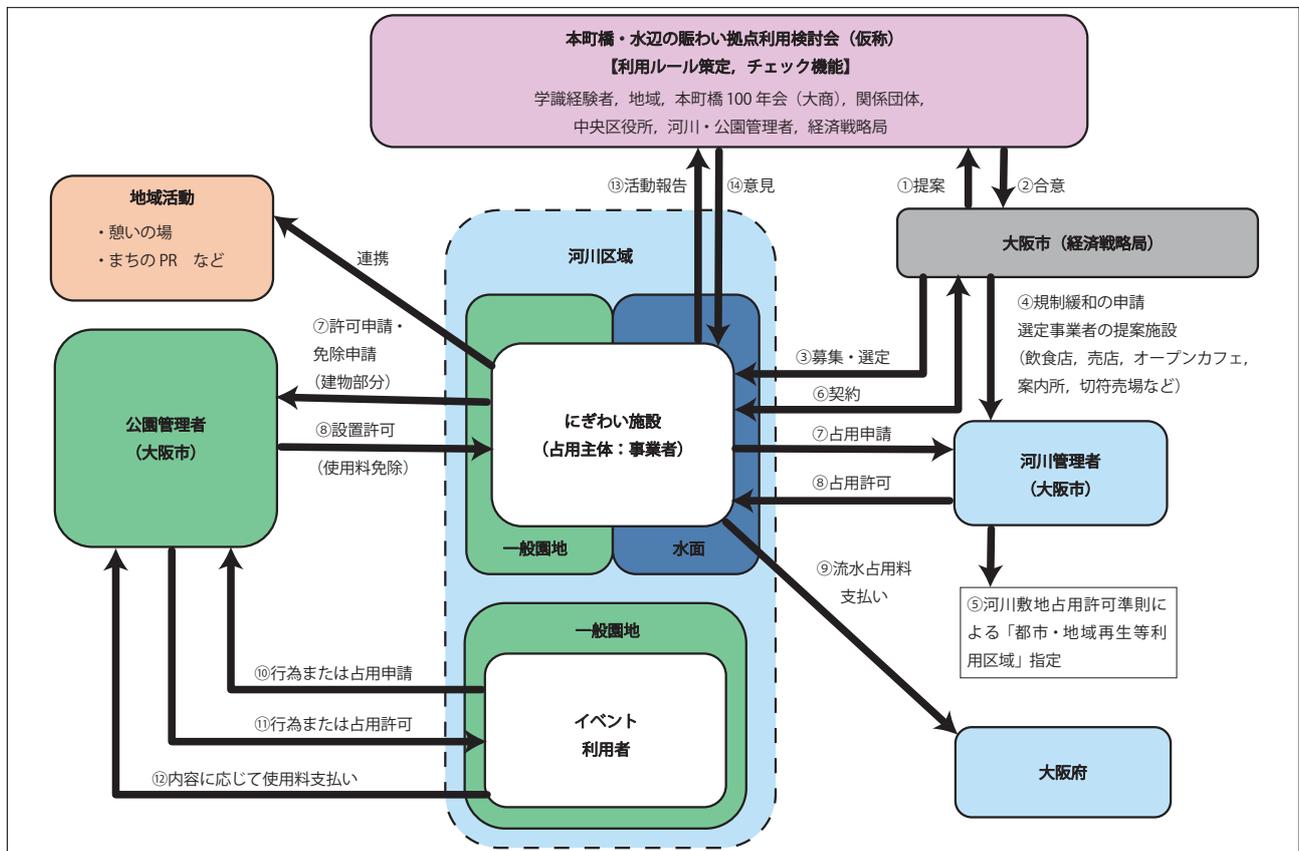


図6 事業スキーム図

出典：大阪市経済戦略局・大阪市建設局, 「本町橋 BASE」にぎわい創造拠点創出・管理運営事業者 募集要項, p7よりトレース

また、敷地周辺は河川区域でもあり、こちらも占用許可が必要である。河川管理者である大阪市が「都市・地域再生等利用区域」として当該エリアの指定を行い、事業者がイベント施設や船着場、船舶係留施設、飲食店等の「都市及び地域の再生等のために利用する施設」の設置が可能になった。

β本町橋の管理運営には、事業者と大阪市の間には、利用ルール策定や、チェック機能を担う「本町橋・水辺の賑わい拠点利用検討会」が設置された。検討会は、学識経験者・本町橋100年会・中央区役所・経済戦略局など官民ともに参加し、毎年度活動報告や意見交換を通して合意形成を行いながら事業が進むようになっている（図6）。

また、β本町橋が誕生した後も、以前から実施していた清掃活動などは継続して行われているほか、大学と連携した卒業制作展示会や、水辺の利活用を相談する「相談屋台」など、β本町橋を利用して地域貢献活動を続けている。

6. 建築的特徴

■ファサードデザイン



写真5 河川側のファサードデザイン



写真7 川側に設けられた流し台



写真8 「リビング」から見た河川側の景色



写真6 屋内と川の間際のスペース「縁側」



写真9 シェアキッチン



写真10 キオスク



写真11 β屋台



写真12 「ラボ」

開口部の数を多くかつそれぞれを大きく設け、圧迫感のない、開放的な佇まいとなっている(写真5)。

2階は1階よりも開口部が大きいのに加え、1階と比べて外側にせり出しており、より川に近づいていくような印象を受ける。せりだしている2階の軒下は「縁側」と名付けられ、室内と川をつなぐ中間的なスペースになっている(写真6)。

窓の柵は格子や壁でなく網が使用され、外観に軽やかな印象を与えるとともに、内部に自然光を取り込みやすくなっている。

■屋外からアクセスしやすい流し台

川掃除や水上アクティビティで使った道具を洗浄できる流し台が、屋外から直接アクセスできる川側に位置している(写真7)。

■リビング

「リビング」は「屋根付きの公園」として楽しめるフリースペースである(時間によってカフェも運営)。人々が川を眺めながら休憩する、パソコンで仕事をするなどが見られた。前述したように開口部が多くとられ、室内にいながらも川の様子を感じられるとともに、通行人に内部の様子が見え、気軽に立ち寄りやすい佇まいとなっ



写真13 ラボから見た外の景色

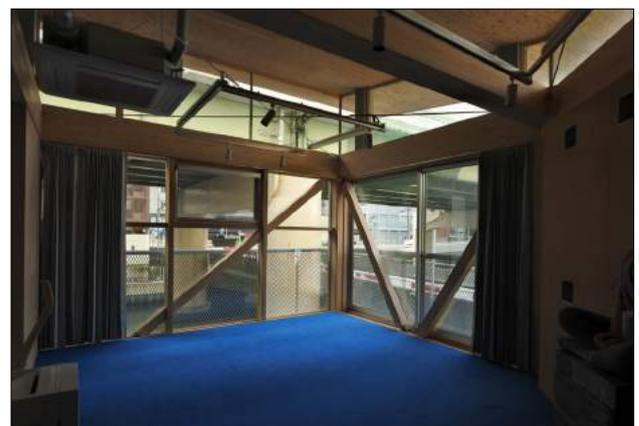


写真14 2F西側の「ルーム」

ている（写真8）。

曜日限定の野菜販売も行われており、農家との繋がりも形成されている。

■キオスク

キオスクは「リビング」に隣接している。壁で仕切られてはならず、座席から調理の様子が見えるようになっていた。β本町橋オリジナルのメニューが調理・提供され、「リビング」の座席で談笑しながら、自分の作業を進めながら飲食を楽しめる（写真9）。

入口の目の前にあるキオスクでは、小規模ながら絵本・文庫本・実用書が並ぶ本棚から本を選び、購入できる（写真10）。備え付けられた屋台は「β屋台」と呼ばれ、レンタル料金を支払えば屋外に持ち出して使用できる。「古本屋台」など、古本やお花、小物が積み込まれ定期的に販売イベントが開催されている（写真11）。

また、キオスクは、シャワーやロッカーなどの利用に関する受付の機能も持つ。入口横のテーブルには、周辺で開催されるイベントのパンフレット・リーフレットが置かれ、地域のイベントに関する情報を集められる。

■ラボ

2階の大部分を占める「ラボ」はレンタルスペースであり、東横堀川や本町橋を眺めながら活動できる。木の部材がむき出しであるのに加え、開口部が多く、開放的な空間となっている。また、訪問時は照明を消灯しているにも関わらず室内は明るく、自然光を効果的に取り込んでいた（写真12）（写真13）。

■ルーム

「ルーム」と名付けられた部屋は、絨毯が敷かれ、靴を脱いで入るスペースである。ここは1時間単位や貸し切りでレンタルできる。他の部屋とは壁で仕切られており、比較的プライベートな空間となっている（写真14）。

7. まとめと考察

本事例で特徴的な点は、初期は市民レベルであった水辺活用に向けた活動が行政に認められ、河川法で建築が許可されない敷地にも関わらず、様々な行政の手続きを経てプロポーザルの結果常設の施設の建設が許可されたことである。水辺の現状を知る人々が「予算ゼロでも、できることから行う」から運動を始め、継続・発展させていく経緯によって、プロポーザルの提案の説得力が強まった側面もあるだろう。また、長年行ってきたソフト活動を、施設設立後も変わらず継続していくこ

とは、常に「今何が必要とされているか」のアンテナの役割を担い、そうしたニーズを随時反映させつつ、運営方針を絶えずアップデートするサイクルを生み出している。

商工会議所・周辺の会社・商店・住民の民間主体で結成されたe-よこ会の活動のきっかけは、東横堀川の3K（怖い、汚い、暗い）を改善する、「現状の問題解決」が目的であった。この活動が拡大するにしたがって、いま目に見える問題を無くすだけでなく、行政も巻き込んで「水辺に付加価値を与える」取り組みにつながった。このように、「現状の問題解決」に端を発し、さらなる付加価値づくりや価値観の共有を目指した活動に連続していくことで、官民間問わず様々な業界に協力関係が広がり、地域それ自体への付加価値の創造につながった事例であると言える。

今後は、e-よこ会の活動をきっかけに東横堀川と関わりを持った人々とともに、β本町橋を拠点に実験を行いながら河川沿いの更なる活性化を目指す。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に、篤く御礼申し上げます。なお、本研究は、科学研究費補助金（基盤B）（22H01668）「ケア中心型社会の基盤となる持続的な「共在の場」とケアの関係構築に関する包括的研究（研究代表者：山田あすか）」の一環として行われました。

[参考文献]

- 1) 国土地理院. “大阪府大阪市中央区本町橋4-8”. 地理院地図. (オンライン), < <https://maps.gsi.go.jp/#17/34.683819/135.510208/&base=ort&ls=ort&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f2> >, (参照 2024- 2-29)
- 2) 商店建築社. 商店建築. Jan. 2023, 2023, p90-91.
- 3) 大阪市. “東横堀川等水辺の魅力空間づくり基本方針”. (オンライン), < https://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/cmsfiles/contents/0000579/579690/03-04-01_houshin-soan01-03.pdf >, (参照 2024- 2-29)
- 4) 一般社団法人水辺ラボ, “東横堀川水辺ビジョン”, <パンフレット>, 2021,
- 5) 大阪市経済戦略局・大阪市建設局. “「本町橋 BASE」にぎわい創造拠点創出・管理運営事業者 募集要項”. (オンライン), < https://www.city.osaka.lg.jp/keizaisenryaku/cmsfiles/contents/0000519/519268/01_bosyuuyoukou_syuusei.pdf >, (参照 2024- 2-29)
- 6) 一般社団法人水辺ラボ, “日常をアップデートする景色に出会おう”. <パンフレット>, 2021,
- 7) 水都大阪コンソーシアム, “ING 東横堀川”, <パンフレット>, 2022,
- 8) β HOMMACHIBASHI. “ヒストリー”. 一般社団法人水辺ラボ, (オンライン), < <https://hommachibashi.jp/about/history/> >, (参照 2024- 2-29)
- 9) 水都大阪. “水都大阪水と光のまちづくり構想概要版”. 水都大阪コンソーシアム, (オンライン), < [- 166 -](https://www.suito-</div><div data-bbox=)